The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	織田作之助と南方派遣日本語教員 ： 「旅への誘い」から「姉妹」へ
Author(s)	小橋, 玲治
Citation	語文. 2017, 108, p. 64-76
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71009
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

織田作之助と南方派遣日本語教員

――「旅への誘い」から「姉妹」へ――

小橋玲治

一　はじめに

太平洋戦時下、日本が占領することとなった南方の地に日本語教員を派遣するという動きがあった。南方に派遣されたことで有名なのは中島敦であるが、彼の場合、前職は確かに私立横浜高等女学校の教員であったものの、それを辞し、一九四一年パラオ南洋庁へ教科書編纂掛として赴任したのであり、形としては役人であった。中島のような南洋での教育との関わりではなく、文部省が全国から公募し、合格者に講習を受けさせ、南方へと日本語教員として派遣したのである。[1]「朝日新聞」一九四二年八月一九日付夕刊の一面記事では「南方、日本語普及案成る」という見出しの下、「今秋教員五百名の講習会」が行われることが報道されており、実際同年一一月一一日の同新聞朝刊の記事では、「廿歳乙女や大将の息」という見出しの下、二・二六事件への関与でも知られる眞崎甚三郎陸軍大将の息子・芳男が合格したことや、合格者五一名のうち一五名が女性であったこと（そのうちの一人が見出しにもある、全体の最年少合格者、清原美恵子）を伝えている。[2]

この事業を作品に取り込んだ作家が織田作之助であった。彼の作品のいくつかには、南方に派遣される女性教師の姿が登場する。「伊都子が、南方派遣日本語教授要員の志願を思い立ったのは、姉の喜美子がなくなって間もなくのことであった。」で始まる「姉妹」[3]をはじめ、織田が映画のために用意したシナリオ作品「四つの都」[4]にも登場する。織田がこのような設定を自作に取り入れたのは、最初の妻である一枝の姉・宮田節子が現実に教師として南方に赴任したからであり、[5]身近から材を取ることの多かった織田らしいと言えるであろう。ここで注目したいのは、「姉妹」にしても「四つの都」にしても、その作品に近いところには必ず「旅への誘い」というレコードが登場しているという共通項があることだ。後述するように、「四つの都」自体にはこの曲は出てこないのだが、その源の一つとなった「木の都」には登場する。

だが、時にこのレコードは改作や変奏の中で消えたり、再浮上したりしているのである。

筆者にはすでに、世紀転換期に起こった、アジア各国への女性教師の派遣の動き及びその表象化について論考があるが[6]、太平洋戦時下で行われた同様の事業について、それ自体の先行研究はあるものの[7]、作品に取り込んだ作家は管見の限り織田以外に見当たらず、織田に関する先行研究においても扱っているものはない。織田にはそれ以前にも、フィリピンから帰還した「ベンゲットの他あやん」の登場する「わが町」（『文藝』一九四二年一一月）のように、直接「南方」が描かれた作品はあるが[8]、「姉妹」や「四つの都」では「南方」は日本語教員としてこれから派遣されるであろう地としてしか設定されていない。尾崎名津子が大阪府立中之島図書館所蔵の織田の旧蔵書から拾い上げているように、旧蔵書中南洋に関する書籍は五冊で[9]、その中でも直接南方派遣日本語教員に関わってくるようなものはない。やはりこの知識は本などからではなく、身内の経験から得たものなのだろう。それでは、織田は南方に派遣される女性教師をどのような存在として提示したのか、そしてそこに「旅への誘い」なるレコードがどのように関わっているのか、この二点について明らかにすることが本稿の目的である。

二　「旅への誘い」から「姉妹」への改作

まずは「姉妹」のあらすじについて紹介しておきたい。冒頭でも最初の一文を引用したように、この作品では、洋裁教師として自分を養ってくれながら、「青春を犠牲にしてはかなく死んで行った」三つ上の姉・喜美子を想う田村伊都子が、「自分もまた姉のように、青春に背いた一生を送らねば姉にすまない」と、南方へ行くことを決心する。新聞で合格者の中に自分と一字違いの「田中伊都子」という名を見つけ、誤植かどうか通知が来るまで不安であった伊都子の元に、合格通知とともに姉宛の一通の手紙が届く。差出人は「佐藤文吾」とあり、二ヶ月も前に亡くなった姉に、思いもよらないことに男性から手紙が届き、伊都子は中身を確認する。手紙には、東京の大学に進学したが、これから学徒出陣するために自分は生きて帰れないであろうこと、東京へ発つ前に姉に貸したままの鷗外の「即興詩人」はかたみとして差し上げること、自分が戦死したら京都の吉田の下宿で一緒に聴いたパンセラの「旅への誘い」のレコードのことを想い出してほしいこと、が書かれていた。生前姉が使い、今は自分が使用している机の抽出しには確かに「即興詩人」が入っていたが、ページをくると、姉の字で「あの人はこの本を残して、去って行った」とだけ書かれた一枚の紙片が挟まっており、伊都子は姉の「ささやか」で「かなしい」青春に思いをはせる。伊都子は佐藤に姉の死を知らせる返信を書きかけたものの、思い直し、姉の名義で激励の手紙を送り、自身も南方派遣日本語教授要員の練成を受けるために上京する。東京駅に着くと、そこでは大学生の出征式が行われており、送り出されているのが他ならぬ佐藤文吾であることに伊都

子は気付く。伊都子はよほど自分が喜美子の妹であることを告げたかったが、門出に暗い影を与えてはと思いとどまり、何も知らぬまま出征していく佐藤の姿が見えなくなるまで改札口に佇む。伊都子は姉に代わって見送ったと呟いて、練成場に行くために電車に乗る。全集にして五ページに満たない短編である。

この元となった未発表作品がある。それがレコードと同じ名を冠した「旅への誘い」[10]である。「旅への誘い」は、大筋は同じではあるものの、「喜美子は洋裁学院の教師に似合わず、年中ボロ服同然のもっさりした服を、平気で身につけていた。」で始まっており、あたかも喜美子が主人公であるかのように、まずは読者には思われるであろう。だが、東京の女子専門学校を卒業し、三年ぶりに姉のいる大阪に戻ってきた道子（「姉妹」では伊都子に変更されている）と再会した晩に高熱を出し、喜美子はそのまま息を引き取ってしまう。そこからの作品の主体は道子となっているので、いわば途中で主人公が変更となっているような印象を読者は受けてしまい、その点では最終的に世に出た「姉妹」の方が完成度は高いと言えるだろう。後の筋、すなわち、姉の死に悲しみながらも南方派遣日本語教授要員に応募すること、新聞で名前が間違えられたこと、合格通知とともに佐藤[11]からの手紙が届くこと、上京と同時に偶然にも佐藤の出征に立ち会ったこと、喜美子の妹であることを名乗り出ないまま佐藤の出征を見送ったこと等、「姉妹」とほぼ同じである。ただし、「旅への誘い」では、病床で喜美子が待ち焦がれているのは梅雨明けの生国魂神社の夏祭であるように設定は大阪だが、「姉妹」ではそれが祇園祭、すなわち京都へと変更されており、これは佐藤を京都の吉田に住む下宿生と設定し直したためだろう。[12]

しかしながら、一番不思議な違いは、「旅への誘い」のレコードを喜美子と佐藤が二人で聴いたという挿話が、作品の題名が「旅への誘い」であるにもかかわらず、こちらでは出てこないことである。また、「即興詩人」に挟まっていた「あの人はこの本を残して、去って行った」の紙片も登場しない。つまり、作中で明かされる喜美子と佐藤の関係は、「旅への誘い」では「即興詩人」[13]だけでつながっていることとなり、これでは離れてしまった二人の紐帯を読者が思おうにも、関係性が稀薄すぎるのではないだろうか。では、登場しないにもかかわらず題名ともなっている「旅への誘い」とは何に由来するものなのか。

「お姉さまがご自分の命と引きかえに貰って下すったあの卒業免状を、お国の役に立てることが出来るのだわ。そうだ、私は南方へ日本語を教えに行こう！」

道子はそう呟きながら、道子は、姉の死の悲しい想出のつきまとう内地をはなれて、遠く南の国へ誘う「旅への誘い」にあつく心をゆすぶられていた。（傍線部は引用者による。以下同様。）

「姉妹」ではこの道子の心の中の「旅への誘い」は明示されず、代わって、姉と佐藤との関係を偲ばせる挿話としての「旅への誘い」のレコードが登場している。原話では「旅への誘い」とは南

方へ自分を導くものであったが、改作では、織田の発想の源であったであろう「旅への誘い」のレコードをそのまま登場させ、姉の報われることのなかった青春の一コマとしているのである。では、そのように利用されている「旅への誘い」のレコードとはどのようなものなのだろうか。

三　織田作之助のレコード「旅への誘い」の取り入れ方

織田には、「姉妹」「四つの都」以外にもこのレコードが登場する作品がある。

「また旅への誘いか。ペリカンにも困るね」

ペリカンの主人は蓄音機の竹針を切って「旅への誘い」のレコードを掛けはじめた――そのことを、野田は言ったのである。ボードレエルの詩をデュパルクが作曲して、パンセラが歌っているこのレコードを、ペリカンの主人は私たちの顔を見るたびに掛ける――その悪癖に私たちはいい加減うんざりしていたのだった。彼はその曲が鳴っている間、一言も口をきかず、鉛のように静かに、時に寂しく、沈黙を守っていた。もっともひどい吃りで、元来無口な男だったが。（「夫婦善哉後日」[14]）

作中の「ペリカンの主人」とは、古書店「ペリカン書房」の主人・品川力（つとむ）（一九〇四～二〇〇六）のことである。檀一雄の証言として、太宰の『ダス・ゲマイネ』に出てくるペリカンのモデルとも言われる人物であるが、一九三一年から書店に鞍替えするまでの八年間、品川はレストランを営んでおり、織田はその店の裏の秀英館という下宿に住んでいたために、「ペリカン食堂」の常連客となっていたのである。品川は織田との関係について、織田の死に際して「越後タイムス」に手記を寄稿しているが、そこでもこのレコードについて触れており、[16]やはり織田とペリカンを語る上では、このレコードの話は欠かせないものなのであろう。

「夫婦善哉後日」からの引用中の説明に補足すると、「旅への誘い」はボードレールの『悪の華』中の一篇の詩に曲と歌がつけられたものである。作曲者のデュパルクとは、アンリ・デュパルク Eugène Marie Henri Fouques Duparc（一八四八～一九三三）のことである。彼はパリ出身で、普仏戦争の結果としてのフランス国内のナショナリズムの高揚を背景とし、サン＝サーンスらとともに国民音楽協会を設立した。また、「旅への誘い」のボードレールだけでなく、テオフィル・ゴーティエやゲーテなどの詩に曲をつけて発表したことで知られる。歌手のパンセラとは、現在ではパンゼラの方が日本語表記としては一般的であるシャルル・パンゼラ Charles Panzéra（一八九六～一九七六）のことである。彼はスイス出身であるが、音楽をパリで学んだバリトン歌手である。彼の学んだパリ音楽院の当時の院長であったガブリエル・フォーレは歌曲集『幻想の水平線』を彼に献呈し、先に挙げたデュパルクも設立に関わった国民音楽協会の演奏会で初演し、名声を高めることとなった。また、フランス HMV と契約を交わし、レコードへの吹き込みもよく行った。[17]品川が店でパンゼラの

この「旅への誘い」をよくかけていたというのにも理由があり、パンゼラの指導を受けていた日本人バリトン歌手、照井栄三（一八八八～一九四五）が品川の友人だったからである。立原道造が好きで、よくききにきたと品川が述べている[18]ように、パンゼラの歌唱は多くの日本人を魅了したようで、このレコードについては他の人物にも多くの言及がある[19]。

「口縄坂は寒々と木が枯れて、白い風が走っていた。／私は石段を降りて行きながら、もうこの坂を登り降りすることも当分あるまいと思った。青春の回想の甘さは終り、新しい現実が私に向き直って来たやうに思われた。／風は木の梢にはげしく突っ掛っていた。」という作品末尾の文章が、現在も夕陽丘に残る口縄坂の石碑に刻まれている「木の都」にも、パンゼラのレコードは登場する。

ある日名曲堂から葉書が来た。お探しのレコードが手にはいったから、お暇の時に寄ってくれと娘さんの字らしかった。ボードレエルの「旅への誘い」をデュパルクの作曲でパンセラが歌っている古いレコードであった。このレコードを私は京都にいた時分持っていたが、その頃私の下宿へ時々なんとなく遊びに来ていた女のひとが誤って割ってしまい、そしてそのひとはそれを苦にしたのかそれきり顔を見せなくなった。肩がずんぐりして、ひどい近眼であったが、二年前その妹さんがどうして私のことを知ったのか、そのひとの死んだことを知らせてくれた時、私は取り返しのつかぬ想いがした。そんなわけでなつかしいレコードである。（「木の都」[20]）

女性がレコードを割っていたり細部は異なるものの、「木の都」の織田自身と思しき主人公の体験は、そのまま「姉妹」の喜美子と佐藤との関係を物語る挿話へと連なっている。発表順で言うと「姉妹」が先であるため、そこからまた別の物語である「木の都」が派生したのかもしれない。「姉妹」が甘い思い出であるのに対し、「木の都」のそれはどちらかというと苦い思い出として認識されている。

ここに登場する矢野名曲堂は、「木の都」も源泉となった「四つの都」にも登場する。「四つの都」は川島雄三の初監督作品である『還ってきた男』（一九四四年七月二〇日公開）の原作となったが、原作者の織田が言うには、六分の五が「木の都」からで、六分の一が別の作品、「清楚」（「大阪新聞」にて連載、一九四三年九月に輝文館より出版）からである[21]。この「四つの都」にも南方へと行く女性教師が登場している。

十吉「尾形さん、あんたは南方へ日本語を教えに行くんですか？」

清子「えっ？」

狼狽する。

十吉「その銓衡試験を受けたんでしょう？」

清子、益々狼狽する。

十吉、清子に新聞を渡す。

十吉「合格者の名前が出ていますよ」（…）

清子「(…) 私はたゞ兄の戦死した土地で働きたい一心なの。(…)」

「清楚」でも兄を戦争で亡くした女性教師・中瀬古清子[22]が登場するが、この挿話は出てこない。このやり取りをしている相手、新聞記者の蜂谷十吉は、後に自身が清子よりも先に南方へと行くことを告げに来る。

十吉「僕はあんたより一足先きに南方へ行く事になった、報道班員だ。あんたに会いたいために南方へ行くと思われても構わぬ、事実そんな気持がないでもない、然し行けば大いに働くつもりだ、あんたに会えなくても構わぬと思っている」

これに対し、清子は「向うで会いましょうね」と応えるのであるが、「清楚」には蜂谷十吉に相当する人物は出てこない。「清楚」では兄の死を告げに来た正平に心を寄せるが、彼は自分の同僚である小谷菊代の見合い相手で、最後は正平の電話越しの求婚に菊代も応えることで物語は終わる。これは「四つの都」でも同様で(ただし、菊代という名ではなく小谷初枝[23])、「清楚」では清子は失恋した形となっている。それを避けるために、南方で死んだ兄を思うあまりに自身も南方へ行こうとする女性教師に寄り添うように、南方へ派遣されることになる新聞記者を新たに登場人物に加えたのかもしれない[24]。無論、それは決して楽観的な未来を指向するものではなく、清子自身述べているように、南方とは兄が戦死した地であり、まさに戦争の最前線なのである。

これも不思議なことに、「四つの都」ではいくつか曲名は出てくるものの、先に挙げたパンゼラについては登場しない。むしろ「木の都」で具体的に名が出てくるのは、デュパルクの作曲したパンゼラのレコードだけであるにもかかわらず、である。この「木の都」とそれを変奏した「四つの都」との関係を、「旅への誘い」とその改作である「姉妹」との関係と併せて考えてみると、興味深い事実に気がつく。「四つの都」や「旅への誘い」では南方派遣日本語教員の挿話が出てきた代わりにパンゼラの歌うレコードが消え、「木の都」ではパンゼラのレコードが登場しているものの、南方派遣日本語教員の挿話は出てこない。この挿話は「四つの都」のもう一つの源流、「清楚」の登場人物と結びつくことになる。そして、両方を兼ね備えている作品は「姉妹」しかない。無論、パンゼラの「旅への誘い」が登場する作品も、南方派遣日本語教員が登場する作品も、織田の作品全体からすれば少ないものであり、それが織田作之助という作家を考慮する上でそこまで重要視せねばならないものなのかという論駁もありうるだろう。しかしながら、現に織田が作品の改作や変奏を行う上で、双方のモチーフがあるいは抹消され、あるいは追加されているのは紛れもない事実であり、織田作之助という作家の創作方法の一端をその細部から垣間見ることも可能なのではないだろうか。

四 「旅への誘い」の *ma sœur* の訳語と織田への影響

ボードレールに「旅への誘い」という題名のついた詩は二つある。『悪の華』に収録された韻文詩(初出は *La Revue des Deux*

Mondes, 1855.6）とは別に、同名の散文詩（初出は *Revue fantaisiste*, 1861.11）があり、先行研究ではどちらか一方を語る上でもやはり両者を俎上に上げている。織田も言及した、パンゼラの歌っているのは『悪の華』所収の「旅への誘い」であるが、'Mon enfant, ma sœur,'という詩句から始まっている冒頭、この「姉妹」を表す ma sœur をどう捉えればよいであろうか。試みに *Le Grand Robert de la langue française*（*2e ed.*）で sœur を引くと、「（普通名詞）姉妹を想起しうる優しさを持つ人に与えた名前」[25]として第三義として出てきており、その用例としてまさにこのボードレールの詩句が挙げられているのだが、フランスの辞書でも扱いかねた故の苦肉の策のようにも見受けられる。

中堀浩和は、「第1詩節は郷愁の念にかられた主人公が深い憂愁に捕らわれた自らの魂に語りかけるかのように、恋人と思える女性に向かって「わが児、わが妹」（l.1）と確信のない口調で呼びかける。（…）「わが児」Mon enfant、「わが妹」ma sœur という言いまわしは〝ベルトの眼〟Les Yeux de Barthe や〝陽気すぎる夫人に〟A celle qui est trop gaie においても用いられているが、この表現からはなまなましく、官能的な男女の愛は感じられない。優しい表現ではあるがそれだけに弱々しい。（…）理想の国は相手の女性に似た国であるが、相手の女性は黙して語らない。どのような女性なのだろうか……漠とした「わが児、わが妹」という言葉のイメージが逆に恋人に投影して、いとわしき女性像を思い描かせる」と述べている。[26]すなわち、「わが児、わが妹」とは恋人のことではあるものの、明示はせずに、その「確信のない」「漠とした」表現なのである。

また、北村卓が扱うのは散文詩の方であるが、「またそのテーマは、タイトルに示されている通り愛する女性を理想の国へと誘うこと、もう少し正確に言うならば、そこに移り住み、愛し合い、そして死ぬ、そうした理想郷への旅への誘いに他ならない。このように、楽園への「脱出」évasion を主題とする作品であると同時に、この国が恋人である女性の存在によって喚起され、詩人の想像力によって構築されたものであることも、おぼろげながら暗示されている。」としている。[27]散文詩となって、ボードレールは婉曲な表現から恋人と明示するに至ったわけであるが、では、韻文詩「旅への誘い」の冒頭、'Mon enfant, ma sœur,'は、日本ではどのように表記されてきたのか。

戦前における『悪の華』の翻訳を見てみると、馬場睦夫訳『ボオドレエル詩集　悪の華』（洛陽堂、一九一九年）のような初期のものにしても、織田と同時代に出た大宰徹雄訳『新訳　悪の華』（京文社書店、一九四一年）にしても、「妹」として訳しており、それをそのまま「恋人」と捉えることが前提の上での訳出のようである。前述のように、大阪府立中之島図書館には織田の旧蔵書があり、HPでその目録が検索できるが、[28]フランス文学の項目の中に河出書房版『ボードレール全集』（一九三九年）の四巻だけあるものの、[29]それは佐藤正彰訳の「浪曼派芸術論」であって、『悪の華』ではない。他に世界文学全集の類が、揃いではなく数

冊ずつあるが[30]、いずれもボードレールではない。ゆえに、織田が何を参照したかまでは分からないのだが、当時の訳出の状況から鑑みるに、「妹」としているのが一般的だったと考えられる。また、パンゼラのレコードの恩恵もあるのやもしれないが、この詩は織田以外の文学者も惹き付けたようで、自作に取り入れたり、言及したりしている。いくつか例を挙げてみたい。

遠藤周作は、『女の一生　二部・サチ子の場合』において、以下のように取り入れている。

「サッちゃん、聞かんね」

三年前と同じように修平は膝の上においた本をひろげて朗読しはじめた。

恋人よ
思いみよ　かの国を
二人して住む　楽しさ
かしこにて　のどかに愛し
愛して死なん……

「ボードレールていう詩人の詩たい。『旅への誘い』ていう題さ[31]」

フランス文学者であり、エッセイストとしても知られた河盛好蔵は、

このなかで私が最も好んで聴くのは「旅のいざない」と、「家のない子どもたちのクリスマス」である。

（…）《わが児、わが妹》という静かな呼びかけから、《夢に見よ、かの国に行き、ふたりして住む心地よさ》（鈴木信太郎訳）と、次第に大海原に船が乗り出してゆくように、幅が広く大きくなってゆく音楽にゆられてゆく心地よさ、その夢見ごこち[32]。

と、鈴木信太郎の訳をそのまま引用している。

福永武彦は、パンゼラの歌うレコードについて言及している。

そのような時に僕はまた「旅への誘い」を思い出した。僕はどんなに長くそれを忘れていたことか。あの一枚のレコード、その中から魔法のように流れ出て来るパンゼラの声。

（…）次に掲げるのがこの詩の第一節と第三節とである。

愛する妹、
いとしい子と、
行こう、二人して暮らすために、（…）[33]

このように、訳は三者三様であり、冒頭の'Mon enfant, ma sœur,'だけでもかなり違っている。遠藤のものは意訳できっぱり恋人と言い切っており、河盛は鈴木信太郎の訳をそのまま利用しているが、これは「わが児、わが妹」と、オーソドックスな訳といえよう。福永のものは「愛する妹、いとしい子と、」と、原詩と順番が逆となっている。

ただし、「子」（あるいは「児」）や「妹」と表現しているのに、それが「恋人」を指すこと自体を疑っているものはない。この異口同音の不思議さに重要な示唆を与えてくれるかもしれないのが、

堀口大学の『悪の華』翻訳である。堀口は冒頭の詩句について、

わぎ妹子(もこ)よ、わが恋人よ、
思ひみよ、その楽しさを、
もろ共にわれ等ゆき、かの国に住み！（…）[34]

としている。この「わぎ妹子」という表現によって想起できるのは、現代的な詩よりは、むしろ古代である。すなわち、「吾妹子」とは、『万葉集』にも一二五首収録されているように、妻や恋人のことを指す表現なのである。[35]『日本国語大辞典』によると、「妹(いも)」の第一義は当然「男性の側から、同腹の姉妹を呼ぶ語。年齢の上下に関係なく、姉をも妹をも呼ぶ。」というものであるが、第二義には、「男性から結婚の対象となる女性、または、結婚をした相手の女性をさす称。恋人。妻。」とある。[36] 'Mon enfant, ma sœur,'と、この呼びかけはコンマによって一呼吸置いているので、別々に訳すのが本来なのだろうが、堀口はあえて古典的な表現で「子」と「妹」を一つにまとめることによって、日本古来の恋人の表現に置き換えてしまっている。しかも、わざわざ「わぎ」とすることによって、読者にそれが古典的な意味であるということの示唆をもしているのだろう。

もしかすると、他の日本人受容者たちが「妹」と呼んでいるのに「恋人」として特に問題視していないのも、日本語のこのような特性がある故かもしれない。また、元々の sœur には「姉」の意味もあるはずなのに、決まって「妹」と訳しているのも、同様の理由によるものではないだろうか。ちなみに、品川は織田への追悼文の中で、自身の訳を披露している。

私の恋人よ、「妹」よ思っても見よ。
あそこへ行って、二人一緒に住むことの楽しさを！

やはりここでも「妹」がそのまま訳出されているのである。

ここまで sœur の訳語について長々と分析してきたが、というのも、「旅への誘い」では姉を亡くした「妹」が、そして、「四つの都」でも兄を亡くした「妹」が南方へ赴任しているのであり、そこにこの日本語における「旅への誘い」の受容が関係してくるのではないかと考えられるからである。すなわち、「フランス語の全く読めない織田作」[37]であるならば、耳から受容したのはパンゼラの歌うフランス語であったかもしれないが、目から受容したのは日本語の「旅への誘い」であったのではないか。その際に、詩が元々有していた恋人の意味が落ち、訳に頻出する「妹」の文字をそのまま継承したとは考えられないだろうか。そもそも織田自身にとって、南方に赴任して行ったのは妻の「姉」である。それを、庇護者を亡くした「妹」と設定し直すことにより、寄る辺なき身の上が旅へと誘われるという発想に至ったとは考えられないだろうか。そこで、身近なところにあった日本語教員の南方派遣というモチーフが、女性が一人で海外へと赴くことの正当な理由として目に映ったのではないだろうか。「四つの都」では南方の地で男女が再会を約束している点に希望を見出すこともできるが、同時にそこは戦争の最前線でもあったことは前述の通りである。

五　おわりに

原詩が「恋人」の物語であることを織田が全く無視していたわけではないことは、「姉妹」において姉の恋人とは言えないまでも異性との思い出の一コマとしてこのレコードを利用していることからも明らかである。その時点では確かにパンゼラの「旅への誘い」は姉のものであった。しかしながら、実際に「旅への誘い」に応えたのは南方派遣日本語教員に応募した妹の方であった。姉は男性についていくことができず、同地に留まり続けることによって妹を養えたのである。先に「旅への誘い」のレコードについて姉と男性との甘い思い出と述べたが、もしかすると旅に誘われても行くことのできない立場からすれば、むしろ辛い思い出に転化したのかもしれない。それが「あの人はこの本を残して、去って行った」の紙片という形で表出したとも考えられる。この点を「即興詩人」が登場する意味とともに読み込めなかったことや、「旅への誘い」の冒頭のみで分析を行い、詩全体を通しての解釈ができなかったことなど、今回の分析では不十分であったところも多々あるが、他稿に譲りたい。

ボードレールが「旅への誘い」において想定している、その目的地とは「オランダ」のことだと言われている。興味深いのは、教師たちが派遣された「南方」とは、オランダ領東インドも含まれていたことだ。すなわち、南方に派遣された教師たち―その中には伊都子も含まれている―の目的地の中には、本国ではないにしても、かつての「オランダ」が含まれていたのである。そのニュアンスまで知っていて、織田が「旅への誘い」を自作に取り入れたとまで考えるのは、これまで考察してきた織田の「旅への誘い」受容から鑑みるに躊躇われるものがあるが、興味深い一致ではある。

注

（1）　太平洋戦争開戦以前にも、「朝日新聞」一九四〇年九月一四日付朝刊の「南方問答」という枠組において、南方での小学校教員になる方法を問う投書が見られる。それによると、南洋庁出張事務所が毎年募集しているようで、その他日本人が多数在籍している「タイ国、マレー、フイリッピン、ジャヴァ等」については、当地の在留日本人会が経営している在外指定小学校があり、各地の日本人会が個別に申請し、地方長官が外務省と文部省に適任者を推薦していたようである。また、その問い合わせ先も国によって異なっており、一括管理はされていなかったようである。

（2）　次年以降も、「血書志願や七十翁　南方派遣教員銓衡始る」（一九四三年二月六日）などの記事が散見され、この講習会は最後の一九四四年六月までに八回開催された。松永典子『「総力戦」下の人材養成と日本語教育』（花書院、二〇〇八年）第四章「「南方」派遣日本語教育要員の「練成」」参照。

（3）　初出は『令女界』一九四三年一一月号、引用は『定本織田作之助全集　第五巻』（文泉堂書店、一九七六年）。

（4）　初出は『映画評論』第一巻第四号（一九四四年四月）。全集未収録であり、引用は『俗臭　織田作之助［初出］作品集』（インパクト出版会、二〇一一年）。

(5) 「『姉妹』の女主人公は日本語教育要員として南方へ派遣されるが、これは一枝の姉宮田節子のことである。すでに東京で講習を受けており、翌十九年一月にジャワへ行く。」（大谷晃一『織田作之助―生き、愛し、書いた。』沖積社、二〇一三年）

(6) 拙稿「小栗風葉『青春』に見る男性領域への侵犯と女性教師の周縁化」、武田佐知子編『交錯する知―衣装・信仰・女性―』（思文閣出版、二〇一四年）参照。

(7) 宮脇弘幸、百瀬侑子「南方占領地における日本語普及と日本語教育」（『成城文芸』一三〇号、一九九〇年）や、前述の松永『総力戦」下の人材養成と日本語教育』など。なお、現地で使用された教科書は倉沢愛子編『南方軍政関係資料⑨日本語教科書』（龍渓社、一九九三年）として復刻されている。

(8) 「ベンゲットの他あやん」ではなく「刺青の他あやん」こと、同姓同名の佐渡島他吉は、それ以前に発表の「立志傳」（『文藝』一九四一年七月）にも登場するが、こちらはフィリピン帰りではない。

(9) 尾崎名津子「記憶と規範の〈フィリピン〉―織田作之助『わが町』論―」（『三田國文』五四号、二〇一一年）

(10) 『定本織田作之助全集』では、第六巻「掌編」中の一篇として収録されている。

(11) ただし、「旅への誘い」では下の名は正助。作中名前が変更にならないのは喜美子のみである。なお、「旅への誘い」では「田中道子」が正しい名であり、新聞で「田村道子」に間違えられるように、「姉妹」とは逆になっている。また、「姉妹」では喜美子の姓は柘植であり、結婚していないにもかかわらず姉妹で姓が異なっていることになるが、その理由については何の説明もなされていない。あるいはそれが、「姉妹」で書かれている「家庭の情況」であろうか。「旅への誘い」では姉妹で姓が異なるようには書かれていない。

(12) 後にも触れる「木の都」には「私の第二の青春の町であつた京都の吉田」とあり、卒業こそできなかったものの、第三高等学校に通っていた織田にとって学生時代と吉田とは分かちがたいものであったのだろう。

(13) なお、「即興詩人」もアントニオとアヌンチヤタとが互いの放浪の末に再会したものの、アヌンチヤタはすぐに息を引き取ってしまう物語であり、これは喜美子と佐藤との関係とも、また、喜美子と伊都子の姉妹の関係とも重なるものであり、本来であれば本稿でも扱うべきであったが、「四つの都」には登場しないこと、そして紙幅の関係もあり、今回はそれをも含めての分析にまでは至れなかった。指摘をいただいた吉田大輔氏に、この場を借りて謝意を示したい。

(14) 『世界文学』一九四六年五・六月号に連載、引用は『定本織田作之助全集　第六巻』（文泉堂書店、一九七六年）。

(15) 青木正美『古本屋奇人伝』（東京堂出版、一九九三年）二一五頁。

(16) 品川力『古書巡礼』（青英社、一九八二年）二四一頁。

(17) パンゼラのレコードについてはロラン・バルトも語っている。彼は「音楽、声、言語」の中で、一時期パンゼラに歌を習っており、辞めた後も彼の声を「数少ない、しかも、技術的に不完全なレコードを通して」、「絶えざる愛の対象」「絶えず蘇る省察の対象」として聴いていたと述べている（ロラン・バルト著、沢崎浩平訳『第三の意味　映像と演劇と音楽と』みすず書房、一九八四年）。

(18) 品川前掲書二五二頁。

(19) 後に本文で引用している福永武彦の他にも、文芸評論家の粟津則雄「《月の光》―フランス歌曲と象徴派の詩人たち」（『粟津則

雄著作集 VI 音楽論』思潮社、二〇〇八年）や、歌人の塚本邦雄「花隠論」（『塚本邦雄全集9』ゆまに書房、一九九九年）などに記載がある。

（20）初出は『新潮』一九四四年三月号、引用は『定本織田作之助全集 第五巻』。

（21）「『四つの都』の起案より脱稿まで」、初出は『映画評論』第一巻四号、引用は『俗臭　織田作之助［初出］作品集』。

（22）中瀬古という姓は、「四つの都」では「清楚」の主人公・正平に当たる人物に引き継がれており、清子は「四つの都」では尾形清子となっている。なお、「正平」という名も「庄平」になっており、すなわち、「四つの都」の主人公の名は中瀬古庄平である。

（23）初枝という名も、元々「清楚」では電車内でたまたま出会い、実は自分に慰問文を送ってくれていた浅間和子の娘の名であった（和子自身はすでに亡くなっており、初枝が和子の名を借りて送っていた）。「四つの都」でその役回りを務めているのは、矢野名曲堂の娘・葉子である。

（24）ただし、作中不幸にならない人物がいないわけではなく、清子の代わりに失恋する人物がいる。それが矢野名曲堂の葉子である。彼女は、慰問文の宛先を訪ねに来た庄平に思いを寄せるが、弟の新吉が名古屋の工場に徴集されたものの、家恋しさに帰ってきてしまう。父である名曲堂の主人・鶴三は、ならば自分たちが名古屋に行こうと言い出し、庄平のことは諦めるよう娘を諭す。「清楚」ではすでに面識のあった浅間初枝に対して思いを寄せていたのは正平なのだが、初枝の父から聟養子が来ることを告げられ、その思いは断ち切られる。「四つの都」ではその立ち位置が逆になっている。

（25）原文は（Appellatif). Nom qu'on donne à une personne pour laquelle on a la tendresse que peut inspirer une sœur. である。

（26）中堀浩和「旅への誘い―韻文詩と散文詩―」（『龍谷大学論集』第四一二号、一九七八年）。

（27）北村卓「散文詩『旅への誘い』の位置」（『言語文化研究』一五号、一九八九年）。

（28）大阪府立中之島図書館蔵「織田文庫目録」―web 版―http://www.library.pref.osaka.jp/nakato/osaka/oda-bunko/oda_top.html（最終確認日：二〇一七年三月三一日）

（29）織田文庫-309

（30）織田文庫-308、織田文庫-321、織田文庫-345

（31）引用は遠藤周作『女の一生　二部・サチ子の場合』（新潮社、一九八六年）。

（32）引用は河盛好蔵『私の随想選　第七巻　私の茶話』（新潮社、一九九一年）。

（33）福永武彦「旅への誘い」、初出は『健康会議』一九四九年五月号、引用は『福永武彦全小説』第二巻（新潮社、一九七三年）。

（34）堀口は八度ボードレールの単行訳詩集を出しており、引用したのは『ボードレール詩集』（新潮社、一九五一年）に収録されたもの。初訳は『空しき花束』（第一書房、一九二六年）に、「旅へのいざなひ」が唯一ボードレールの詩として収録されたもので、その際には「わぎもこ」とひらがな表記であった。引用は『堀口大學全集　第四巻訳詩Ⅲ』（日本図書センター、二〇〇一年）。

（35）「吾妹」「吾妹児」という表記も含める。なお、特に集中しているのが全二〇巻のうち二八首収められている巻一一と、二二首収められている巻一二である。

（36）「「妹」という言葉は基本的に、女性に対する自己の好意を主観的に表す言葉だと言えるだろう。」（櫻井ちひろ「人称を超えた「妹」の表現」、『同志社國文学』第八六号、二〇一七年）

（37）西川長夫「織田作之助とスタンダール、あるいは京都の織田作

之助について」（『仏文研究』一七号、京都大学フランス語学フランス文学研究会、一九八六年）

（こはし・れいじ　本学大学院助教）